

# 平成25年度事業報告書

自平成26年4月1日 至平成27年3月31日

公益財団法人大平正芳記念財団

## I. 事業活動の概要

公益財団法人として、3つの公益事業「環太平洋学術研究奨励事業」、「北京日本学研究センターとの共同事業」、並びに「当財団の事業について普及・啓発・啓蒙を行う事業」について、個々事業の公益性と運営の効率化に留意しつつ、着実に遂行した。

### 1. 環太平洋学術研究奨励事業

- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| [1]第29回大平正芳記念賞 3件 | クリスタル牌<br>賞金 300万円 |
| [2]第27回学術研究助成費 1件 | 助成費100万円           |

平成25年6月12日に上記の授賞式を日本工業倶楽部で行った。

### 2. 北京日本学研究センターとの共同事業

2013年12月17日(火) 15:30～19:00

於:北京日本学研究センター 多目的ホール

北京外国語大学迎賓レストラン

例年の共同事業の他、森谷 正規先生(放送大学名誉教授、当財団運営・選定委員)並びに、王勇先生(浙江工商大学教授)による記念講演会を開催するとともに、センター主催招待会に出席した。

#### (1) 「第九回日本語優秀学位論文大会」表彰式

表彰式に先立ち、下記3名の方より挨拶が行われた。

- ① 当財団を代表して、及川 正通事務局長(理事長挨拶を代読)  
内容については、本報告書9頁～11頁に収録を参照。
- ② 国際交流基金北京日本文化センター所長 吉川 竹二様

③ 北京日本学研究センター長 徐一平様

内容については、本報告書12頁～14頁に収録を参照。

多くの応募者の中から、次の5名に賞状と記念品の授与を行った。

名前	専攻	論文テーマ
邵明琪	日本文学	横光利一『上海』(1928-1940)論 —テクストの生成と変容に関する通時的な検証
柯冰	日本語教育	中国人日本語学習者のオノマトペの習得状況に関する一考察—副詞・する動詞用法の ABAB 型オノマトペを中心に
陈彦君	日本文化	岡倉天心のアジア主義に関する再考—第一回中国旅行を中心に
崔振宇	日本経済	日本の地方財政調整政策に対する一考察—格差是正効果と最適な調整について
孙媛媛	日本語学	<可能>を含意する有対自動詞文に関する一考察—有対他動詞可能文と関連しながら

(2) 日本学術名著の翻訳・発行(教材)事業(7年度目)の実施

- ①『日本思想史ハンドブック』の翻訳が完了し、2013年2月に発行した。(平成23年度からの継続事業)
- ②『徳川合理思想の系譜』について、出版担当社より編集経過の報告があった。(平成23年度からの継続事業、発行は2014年度の予定)

(3) 森谷 正規先生による記念講演会

「日本と中国の技術・産業における互恵関係の発展について—比較技術学と相性から考える」をテーマに、「中国での比較技術学の発想」「比較技術学とは何か」「比較技術学から国と技術・産業の相性が生じる」「相性で国際分業をすれば、互恵関係が成立」「如何なる分野で互恵関係の可能性が大きいか」「環境問題への日本の寄与」「右手の握手を拡大する」と講演は進められた。

内容については、本報告書6頁～8頁に収録の要旨を参照。

(4) 王勇先生による記念講演会

「東アジアにおける「漢字」の誕生」のテーマで講演が行われた。

(5) センター主催による招待会の開催

北京外国語大学迎賓レストランに会場を移して、北京日本学研究センター主

催による招待会が開催された。

### 3. 当財団の事業について普及・啓発・啓蒙を行う事業

#### (1) 図書の制作と無償配布を行う事業

平成24年6月に『大平正芳全著作集』最終第7巻を刊行し、全国190箇所の大学附属図書館及び香川県下63箇所の高校・公立図書館に無償配布を行った後の対応として、当著作集の内容に係る各方面からの照会、マスメディアによるテレビ番組への引用の要望等に的確に対応することを通じて、当財団の事業について普及・啓発・啓蒙を図った。

#### (2) 大平正芳記念館運営事業

以下の経緯に基づき、平成26年3月25日、理事会において「大平正芳記念館閉館」に係る審議を行い、閉館やむなしとの結論に至り、閉館を決議した。

①当記念館建物について、選挙事務所として昭和36年に建築、その後昭和55年に増築を行い今日に至っており、経年による建物老朽化に伴う補修費用について、平成25年8月に業者あて見積もり依頼を行ったところ、多額(1,400万円)の費用見積もりに接したこと。

②平成22年5月に土地・建物・所蔵品すべてについて、永続的な保全と有効活用を行うことを前提に、観音寺市あてに寄附申出を行ったところ、いわば無条件を前提の受け入れの回答に接したため、寄附申出を一時留保とする手続きを行い時日が経過するも、状況の好転が望めないこと。

③著名人を記念・顕彰している他の類似の記念館、たとえば、福知山の芦田均記念館、あるいは民間人なるも岡山の岡崎嘉平太記念館が公的記念館として設立されるに際して強力なバックボーンとなった、地元後援者により組織された顕彰会・維持会のような組織による支援・協力が望めないこと。

等の状況に鑑み、記念館運営事業を継続すべきか判断を行う時期が到来していると思料し、閉館を想定した場合の所蔵物受入れの可否について確認すべく、図書について香川県立図書館に対して確認を行ったところ、そのすべてについて受け入れるとの回答があったこと。遺品関係について香川県立ミュージアム(博物館)に対し確認を行ったところ、その一部について受け入れるとの回答があったこと。そして、文書類については、そのほぼ全てをすでに国立国会図書館憲政資料室あてに委託保管済みであること。

因みに、当年度来館者数は1,641名(前年度比△249名)であった。なお、大平元総理の生地・観音寺市豊浜町和田浜にある豊浜中央公民館に設置の「大平正芳記念室」については、小規模ながら永続的に維持・運営される。

(3)「大平正芳記念財団の事業」パンフレット及び「大平正芳記念財団レポート」発行事業

①「大平正芳記念財団の事業」パンフレットの発行

ア.「大平正芳記念財団の事業」パンフレット

イ.「大平正芳記念財団の事業活動」(平成24年6月から同25年5月まで)リーフレット

②「大平正芳記念財団レポート」第31号の発行

## II 本年度中の主な庶務事項

### 1. 理事会・評議員会

(1)平成25年5月27日開催 臨時理事会(決議の省略(書面表決))

①平成24年度事業報告及び収支決算承認の件

②内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛定期提出書類  
(平成24年度事業報告及び収支決算に係る)承認の件

③評議員会の日時及び場所並びに目的である事項等決定の件

(2)平成25年6月12日開催 通常理事会、定時評議員会

①平成24年度事業報告及び収支決算承認の件(評議員会マター)

②理事改選の件(評議員会マター)

③評議員選任の件(評議員会マター)

④役員報酬支払承認の件(理事会マター)

⑤特定寄付金募集承認の件(理事会マター)

⑥職務執行報告(理事会マター)

(3)平成26年2月27日開催 臨時理事会

①評議員会の日時及び場所並びに目的である事項等決定の件

(4)平成26年3月25日開催 通常理事会、臨時評議員会

①平成26年度事業計画及び収支予算承認の件

②運営・選定委員長選任の件(理事会マター)

③職務執行報告(理事会マター)

## 2. 運営・選定委員会

本年度中に計4回開催し、第30回大平正芳記念賞・第28回学術研究助成費授賞者並びに、第2回鈴木 三樹之助記念・岩手大学大学院奨学金支給対象者を決定した。

## 3. 主務官庁関係事項

平成25年6月24日、内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛に、評議員・理事の異動に伴う、登記事項変更の届出を行った。

平成25年6月26日、内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛に、平成24年度事業報告及び収支決算に係る、定期提出書類の届出を行った。

平成25年7月29日、内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛に、寄附金の税額控除に係る証明申請を行い、8月8日付で平成25年8月8日から平成30年8月7日までを有効期間とする証明書の交付を受けた。

平成25年12月12日、内閣総理大臣(内閣府大臣官房公益法人行政担当室)宛に、堤清二様ご逝去に伴う評議員退任に係る、登記事項変更の届出を行った。

平成26年3月27日、内閣府公益法人行政担当宛に、平成26年度事業計画及び収支予算に係る、定期提出書類の届出を行った。

## 4. 登記事項

評議員・理事に関する事項 2件

平成25年度事業報告には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第34条3項に規定する附属明細書は、「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので作成しません。

# 放送大学名誉教授 森谷 正規先生講演録(要旨)

(2013.12.17 於・北京日本学研究中心)

テーマ: 日本と中国の技術・産業における互恵関係の発展について  
比較技術学と相性から考える

## 1 中国での比較技術学の発想

1980年に中国訪問、20工場を視察 北京、上海、鞍山、瀋陽、長春など。

日本との国情の違いによる大きな相違に気づく。

国が違えば、技術・産業が異なる「比較技術学」を発想する。

韓国を加え「日本・中国・韓国産業技術比較」を執筆。(1980年、東洋経済新報社)

1985年に大平正芳記念賞(第一回)を受賞

## 2 比較技術学(Comparative Technology)とは何か

国民性、社会状況、経済水準、産業力、資源などによって、技術・産業に相違が生じる。

比較文化論、比較文明論の一種。

比較学: 文明、言語、宗教、政治、法律

付表「比較技術の要因」

1987年北京で機械工業出版社が「低成本高質量的奥秘密—日本的技術」を出版

英語出版「Japanese Technology—Getting the Best for the Least」の翻訳

その最後に比較技術学を紹介

実例として携帯電話

日本 通信会社が企画・販売、非常に多機能で常に世界先端、日本市場にだけ適合、

少数大企業が開発、巨額の開発費、長期間の開発、少ない機種、不当に廉価

中国 製造会社が開発、多様な市場に向けて非常に多い機種、開発企業が非常に多い、

少額の開発費、短期の開発

## 3 比較技術学から国と技術・産業の相性が生じる

各国の国情に相違がある。技術・産業の性格に相違がある。その組み合わせで相性が生じる。男女間の相性と同じ。

相性が良ければ、力を発揮出来る。

日本の相性を見て、産業の強弱が分かる。

日本の技術・産業の特色と強さ

1) 丹精を尽くして作る。

2)現場が優秀で強い力を持つ。

3)「義と信」で作る。義は世に役立つもの、信は顧客に品質で信頼される。

日本の電機産業は、何故韓国に敗れたか？

テレビ(テレビ)は、丹精を尽くしても製品の性能は同じ、画面の美しさは不変。

半導体は、顧客が変わった、大型電脳(コンピュータ)から人電脳(パソコン)へ、高性能、高品質は不必要、低価格が求められるが、日本は対応が遅かった。

日本の乗用車は強い。

非常に複雑な機械、多様な性能(走行、操縦、静粛、無故障、燃費、外視設計)。

丹精を尽くせば非常に優秀になる。

日本の弱点は、戦略に弱い。電機産業は韓国(三星、LG)に戦略で敗れた。

三星の戦略:販売、広告、外視設計、投資

戦国時代までは戦略に強かったが、徳川幕府の長い平穩で弱体になった。

策略は日本では悪い印象の言葉、丹精を尽すの表裏

#### 4 相性で国際分業をすれば、互恵関係が成立

日本と中国で、互恵(Win・Win)の関係を築く

中国は、どの産業に相性が良いのか、特色と強さ、弱さは何か？

1)労働力が豊富で費用は低い。(何時まで如何に低いかは問題)

2)向銭意欲が強く、企業家が多く出る。

3)戦略は強い。「上に政策あれば、下に対策あり」

日本は藩主が良君で恩情、上に素直に従う、策は不要。

中国は地方長官が苛斂誅求 策略が不可欠。

4)丹精を尽くすかどうか疑問、肉体労働を蔑視の風潮。

「文章は不朽の盛事にして、経国の大業なり」

「良い人は兵にならず、良い鉄は釘に打たず」

5)巨大な社会基盤設備、装置への需要が非常に大きく、力を注ぐ。

#### 5 如何なる分野で互恵関係の可能性が大きいか

1)日本が強い高度な素材、部品を、中国が多様な製品に活用。

国内ばかりではなく、海外諸国に展開する。非州、中東、印度、俄など。

中国企業は、海外市場開拓の意欲と戦略に強い。

商売の神様関羽の「義」と「信」を今こそ活用。

各国が求めるものを供給する、高品質で信用、信頼を得る。

2)社会基盤設備、装置に日本の計測、制御装置や核心部材を組み込む。

核電站の圧力容器、計測・制御装置。

飛行機のCFRP(炭素纖維強化樹脂)などの素材、部品。

高速鉄路の安全、能源節約装置 磁気浮上超高速鉄路。

船舶の能源節約の装置。

### 3) 高度な技術が必要な第三次産業で協力

日本のサービス(服務)の優秀性は製造業と同根。

丹精を尽くす、現場が優秀、顧客第一で信頼

具体例

水の供給及び処理:水道は漏水率が極めて低い、数%。

宅配便:連鎖飯店の非常に高度な系統。

医療、介護:美国の手術用机器人の主要な部品は日本製。重粒子線癌治療装置は日本が最先端。

都市廃棄物の収集と処理。

## 6 環境問題への日本の寄与

比較技術学の視点が必要、問題の状況の相違の認識

1970年代の日本:火電站、鋼鉄工場などの大規模設備が発生源 対応は容易

今の中国:汽車、家庭、小工場などの小規模で多数の発生源、対応が困難

対応策:汽車 小型軽量で性能を抑えた電気汽車、

日本では普及は不可、高い性能が必須で非常に高価格、

中国は普及可能性、政府の強い政策で実現、

問題は電池、磷酸鉄の Lithium-ion 電池に価格の大幅低下の可能性。

家庭 高い効率の灯油排気暖熱器。

小工場 小型で低価格の排気浄化装置の共同開発。

## 7 右手の握手を拡大する

外交、国際関係は、右手で握手、左手で殴り合う。

殴り合いは、両国の破滅。

技術・産業で握手して、互惠関係を深めて行く。

両国共に勝者になるのが可能。

大平正芳元首相もそれを強く望んでいる。



## 2013年度 日本語優秀学位論文表彰式、日本学術名著発刊式 挨拶

ただ今ご紹介いただきました、大平正芳記念財団の及川正通でございます。

本日は、国際交流基金・北京日本文化研究センター所長・吉川 竹二様のご臨席をいただきまして、本年もこの場でご挨拶を申し上げる機会を賜りましたことを、誠に光栄に存じます。本日、ご講演をいただく王勇・浙江工商大学教授殿、北京日本学術研究センターの親愛なる徐一平センター長殿、笠原清志主任教授殿、関係者の方々にも厚く御礼申し上げます。

当財団大平 裕理事長からの挨拶を代読させていただきます。

昨年来、東シナ海の海域・空域をめぐる問題に起因いたしまして、日中両国間において政府首脳による交流が実質的に途絶えております。一時は不測の事態もありうるのではないかと情勢も懸念され、緊張状態が続いておりますことは、誠に遺憾なことと言わざるを得ません。貴国といたしましても、大国として国際法のルールを守り、地域の安全と平安を維持されるよう心より望んでおります。

振り返りますと、父大平正芳は、1979年12月、首相として当地北京の政協礼堂で「新世紀を目指す日中関係」の題目で行った講演におきまして、唐代の高僧・鑑真和上が、生命の危険をも顧みず、万里の風濤(ふうとう)を越えてわが国に渡航され、仏教ばかりでなく、その弟子たちを通じ、建築、彫刻、文学、医学の面でもわが国の発展に貢献されたことになぞらえて、「二十一世紀に向かうこれからの時代にも、数々の荒波が襲うでありましょう。日中間においても、その荒波の中で、両国が時に意志を異にし、利害関係を異にする局面も出てくるかもしれません。しかしながら、両国間の二千年来の友好往来と文化交流の歴史を振り返り、今日われわれが抱いている相互の信頼の心を失わずに努力し続けるならば、われわれの子孫は、永きにわたる両国の平和友好関係を世界に誇るようになるでありましょう」と述べております。

この講演から34年が経過し、ある意味で当時より厳しい情勢にありますことは大変残念なことではありますが、まさしく父の子孫である私を始め大平正芳記念財団の関係者としていたしましては、あらためて父のこの言葉をしっかりと受け止め、引き続き努力を重ねてまいらねば、と認識を新たにしているところであります。

と同時に、志を持って日本の社会経済、文学、言語、文化、言語教育を学ばれている皆さんに対しましても、勉学を深め、信念を持ち、良き伝達者として大きな役割を果たされるよう、心より期待しております。

本年6月に東京で行われました、貴センター修士課程27期生、博士課程12期生合同レセプションに、当財団は久しぶりに出席させていただきました。

修士課程28名が4か月間、博士課程13名が1年間、日本の大学、研究機関を中心に所属し、それぞれの研究論文の作成・仕上げに向けて研究活動に専念されるとのこと、非

常に意義あることと受け止めますとともに、大変うらやましく思いました。中国国内において、希望しても留学の機会を得られない方も多数おられると思われれますため、そのような貴重な機会を得られました皆さんには、大いに感謝していただきたいと思った次第です。

皆さんの中にはきっと、これからこのプログラムに参加される方も多数おられるかと思えます。せっかくの機会でありますから、短い期間の中ではありますが、ひとりでも多くの日本人の学生と信頼関係を築き、留学が終わった後も長く付き合いのできる出会いがあることを期待しております。

先日、日本の新聞に、日本の大学で留学経験のある香港の実業家の体験談として、「日本との取引でトラブルにあった際、解決に力を尽くしてくれたのが留学時代に付き合いのあった日本人であった。学生時代の出会いは一生の宝になると実感した」との記事が掲載されておりました。誠に喜ばしいお話であるとうれしい気持ちで心がいっぱいになりました。

そして、皆さんには、留学中に大学の中だけではなく、できるだけ幅広く一般市民の方とも交流され ありのままの日本人の所作(しよさ)・振る舞い・考え方に触れていただきたいと思うのであります。

釈迦に説法のように恐縮ですが、皆さん、中国に「百聞は一見に如かず」ということわざがあるのはご存じのことと思えます。現地日本に赴き、ぜひとも幅広い層の日本人との交流を通じて、皆さんが中国で描いていた日本、日本人に対するイメージと実際の違いをぜひとも確かめていただきたいと思えます。

そして、中国に帰られた後、その結果をぜひ中国の多くの方々に伝えていただきたいと思えます。毎年、このような交流とそのフィードバックともいえる情報の伝達の蓄積が、国家レベルの誤解・摩擦といったものの解消に少なからず繋がるものと確信しております。

大平正芳記念財団は、毎年、北京におきまして「日本語優秀学位論文表彰」「日本学術名著翻訳事業」等、北京日本学術研究センターとの共同事業を行っているところであり、微力ながら、皆さんを支援したいと考えております。

是非とも皆さんが、学術書、参考文献あるいは担当教授の指導を中心とした座学と、日本への留学を含むフィールドワークを通じて多くのことを学ばれ、日中友好の懸け橋となられますことを祈念いたしております。

(日本語優秀学位論文表彰式)

さて、「日本語優秀学位論文賞」は、北京日本学術研究センターの前身であります、「日本語研修センター」、通称「大平学校」の創立25周年を記念いたしますとともに、「北京日本学術研究センター」創立20周年を記念して設けられ、今年で九回目となります。

今回を含めこれまで合計50の優秀な「日本語学位論文」に対し、賞を授与し、表彰してまいりました。

今年も優秀な成績を収められた5名の方が表彰されます。この「日本語優秀学位論文賞」に今後も多くの学生の皆さんが参加され、貴センターと財団の共同事業としてますます

発展されることを期待しております。

(日本学術名著翻訳・出版事業)

「日本学術名著翻訳・出版事業」につきましては、北京日本学研究中心による中国国内に向けての文化・教育活動の推進と、中国全土の高校・大学における日本関連の教材の充実強化を図ることを目的として、2007年度に開始されました。

皆様すでにご存知の方も多数おられるかと存じますが、これまでに、『徳川思想小史』『柳田國男が描いた日本—民族と社会思想』『環境社会』『環境と資源の経済学』『永遠の今に生きる』の5冊を出版し、貴センターをはじめ、全国80を超える高校・大学等に配布を行っております。

本日は、2011年度事業で計画しました『徳川合理思想の系譜』の発刊式と、本年度に計画しております、『ライシャワーの日本史』の翻訳趣旨を説明させていただきます。

『徳川合理思想の系譜』の発刊に関しましては、後程、郭連友教授からご紹介いただくこととして、ここでは、『ライシャワーの日本史』の翻訳趣旨を説明させていただきます。

本年度、当財団と貴センターとの「日本学術名著翻訳・出版共同事業」として、エドウィン オー・ライシャワー氏が書かれた『ライシャワーの日本史(原題: JAPAN The Story of a Nation)』を採り挙げることにいたします。

同書の中国語への翻訳につきましては、7年ほど前に一度検討されましたが、このたび翻訳出版権の問題が解決し、ようやく出版実現の運びとなったものであります。

すでにご存じの方もおられると思いますが、ライシャワー氏はかつてアメリカ合衆国の東洋史研究者であり、駐日アメリカ大使を務められた方であり、大使退任後はハーバード大学日本研究所所長として日本研究を推し進められた方であり、中国史研究者でもあり、1930年代に北京大学で研究活動を行う傍ら中国語を学び、1955年から1963年までハーバード大学燕京(えんきょう)研究所所長を務められるなど、中国とも関係の深い方とお聞きしておりますので、皆さんの中でもご存知の方がおられることと思います。

日中両国の当事者ではなく、外交官かつ研究者として、広い視野と見識を持つ第三国の方の公平な視点からの著作として、北京日本学研究中心はもとより、とくに中国の若い学徒の方々を中心として、日本の歴史について関心と理解を深めていただければと願っております。

以上をもちまして、「日本語優秀学位論文表彰式」「日本学術名著翻訳・出版事業発刊式」のご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

尊敬する大平正芳記念財団事務局長及川正通様  
日中協会理事長白西紳一郎様  
国際交流基金北京日本文化センター所長吉川竹二様  
ご臨席の先生方、ご参加の皆様  
こんにちは

この度、「第9回北京日本学研究センター優秀修士論文大平正芳記念財団賞授賞式」の開催にあたり、私は北京日本学研究センターを代表して、授賞された受賞者の学生の皆さんにお祝いの意を表わすと同時に、長年来ずっとご支持とご協力をいただいている大平正芳記念財団の大平裕理事長をはじめ、財団の皆様から心から感謝の意を申し上げたいと思います。

北京日本学研究センターの前身である「中国日本語教師研修班」は、1979年12月、故大平正芳首相が中国を訪問されたときに、日本政府を代表して、中国政府との間に締結された「文化交流協定」に基づいて作られた、中国大学日本語教師を再教育する研修コースです。1980年から1985年までの五年間に、当時の中国大学日本語教師のほぼ総数に当たる600名の大学日本語教師に対して研修を行いました。この事業が中日双方からも高く評価されたために、皆さんが親しみをこめて、それを「大平学校」(中国語では「大平班」と呼んでいました。後に中日双方の有識者の合意により、「大平学校」の発展として、更に大学院生、博士課程の人材を育成するために成立したのが、今日の北京日本学研究センターであります。

特に、北京日本学研究センターの新館が建設された2003年ころから、大平正芳記念財団の皆さんが、大平正芳首相の遺志を受け継いで、北京日本学研究センターに対して、多大なご支持とご協力を与えていただきました。まず、新館の図書館に対して「大平文庫」を寄贈していただき、故大平首相が生前にお使いになった遺留品や大平首相夫人が使われた茶道の道具と大平首相を偲ぶ写真なども寄贈していただき、図書館の入り口に大平正芳首相展示コーナーを作りました。このコーナーにより、当センターの図書館を訪れる若者たちに、中日友好のために大きく貢献された先駆者たちを偲ばせてもらい、今後自分たちも中日友好促進のために貢献するように決意してもらうような効果を発揮しております。

更に、2005年から当センターに在籍する若者を励むために、当センターの修士論文を対象にして、「大平正芳記念財団賞」を設け、毎年優秀な論文に対して授賞するというプログラムを実施しました。そして、2010年に、それまで授賞された優秀な論文をまとめて、『日本語優秀学位論文集 北京日本学研究センター財団法人大平正芳記念財団賞論文集(前編・後編)』を刊行しました。

ところで、今年の7月に発表された、日本国際交流基金が行われた「2012年海外日本語教育機関調査」の結果によると、2012年現在、世界の日本語学習者数は約400万人に達し、2009年に調査した時点と比べ、9.1%増加しています。その中で、中国大陸におけ

る日本語学習者数は 105 万人になり、2009 年の時点より 26.5%も増えており、日本語学習者数の最も多い国となりました。そして、中国の日本語学習者の中で、最も顕著な特徴としては、やはり大学での学習者数が最も多く、約 7 割近くの 67 万人が大学であるいはそれ以上の修士課程や博士課程で日本語を勉強しています。これらの学習者は、いずれも将来重要な役割を果たし、中日の相互理解を促進し、日本文化の良き理解者と良き研究者の予備軍になるに違いありません。もちろん、中国は人口大国であり、どんなに大きな数字であっても、中国の人口で割れば、小さな平均数になってしまいます。この意味で考えれば、中国の日本語学習者数はまだまだ少ないと思います。それでも、この調査データはやはりわれわれ中国の日本語教師の皆さんにとっても、国際交流基金にとっても、とても喜ばしい数字だと思われま。しかし、私がここで注意していただきたいことは、この調査は 2012 年の 9 月までには既に終了しているということでありま。もし昨年 9 月以降、引き続き調査を続けているのであれば、果たしてまたこれと同じような結果が出ていたかどうかは、とても自信がないと思いま。昨年 9 月以来、中国国内において、多くの社会人日本語学校が倒産寸前にお追込まれていたこと、一部の大学の日本語専攻の募集が減員させられたこと、また、この夏、日本語専攻の大学生の就職も厳しい現実に直面されたことなどは、いずれもそれ以来の中日関係の厳しさを物語っていると思いま。従いまして、われわれ中国の日本語教師や日本研究の者どもは、本当に心から中日両国の関係が一日も早く改善されるよう期待してやみませ。

北京日本学研究中心は、まさにそのような日本を研究し、日本文化を理解し、中日両国の相互理解を促進するような人材を育成する教育機関でありま。「大平学校」の時代も含めると、ここ 30 数年来、中国の日本語教育と日本学研究中心のために、およそ 1500 人以上の優秀な人材を養成してきました。本日の授賞式に合わせて、自分の長年来執筆してきた著書、編著 60 数冊も当センターの図書館に寄贈していただく王勇教授は、これら多くの卒業生の中で代表的な人物でありま。

王勇教授は、「大平学校」の四期生で、北京日本学研究中心の一期生です。卒業してから、浙江大学日本文化研究所所長、日本早稲田大学、国際日本文化研究センター、国文学資料館、アメリカコロンビア大学などの客員教授を歴任し、今は浙江工商大学東アジア文化研究院院長、北京大学客員教授、中国中外関係史学会副会長、中国日本史学会副会長などを兼任してありま。東アジア文化交流史を専門とする王勇教授は、20 数年来 40 数冊の著書を出版し、その中で、『中日漢籍交流史論』が国家教育部第一回人文社会科学優秀成果二等賞、『中日文化交流史大系』がアジア太平洋出版協会 (APPA) 学術類金賞、『日本文化—模倣と創造の軌跡』が浙江省教育庁哲学社会科学優秀成果一等賞など数々の大賞を獲得してありま。本日、王勇教授がこれらの代表作も含めて、ほかの編著、論文集などと一緒に当センターの図書館に寄贈していただくことは、センター卒業生として最も素晴らしい報告の形となり、また後輩の皆さんにとっても、最も大きな励ましになるのではないかとと思いま。

それから、本日の授賞式の後、私たちは、日本の放送大学名誉教授森谷正規先生に「日本と中国の技術・産業における互惠関係の発展について」というテーマで、王勇教授に「東アジアにおける『漢字』の誕生」というテーマで記念講演をしていただくことになっております。本日の授賞式、寄贈式並びに記念講演会は、きっと現在センターで勉強している学生の皆さんにとって忘れられない思い出になるに違いないと思います。

最後になりますが、改めて長年来当センターにご支持とご支援をいただいている大平正芳記念財団の皆さんに感謝し、本日ご講演をいただく放送大学名誉教授森谷正規先生、浙江工商大学王勇教授に感謝し、本日授賞された学生の皆さんに祝賀の意を申し上げて、私の挨拶といたします。

ありがとうございました。